

氏名(本籍)	た がわ たく み 田 川 拓 海 (沖縄県)
学位の種類	博 士 (言語学)
学位記番号	博 甲 第 4882 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	分散形態論による動詞の活用と語形成の研究

主査	筑波大学教授	博士(言語学)	沼田善子
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	杉本武
副査	筑波大学教授	Ph.D.(言語学)	竹沢幸一
副査	筑波大学准教授	博士(言語学)	那須昭夫
副査	筑波大学准教授	Ph.D.(言語学)	森芳樹

論文の内容の要旨

本論文は、現代日本語の活用形の形成過程といくつかの関連する語形成の現象が、分散形態論 (Distributed Morphology) を用いることにより、統一的に分析、説明できることを示そうとする、理論言語学的研究である。本論文の構成は以下の通りである。

- 序章 活用と形態論：本論文の立場と目的、考察の対象
- 第1章 分散形態論の導入と活用に対する統語論的アプローチ
- 第2章 Elsewhere form としての連用形
- 第3章 未然形の位置付け
- 第4章 活用形の共存：推量形式「だろう」と「まい」の非対称性
- 第5章 命令文、命令形と否定命令
- 第6章 動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について
- 第7章 統語的語彙分解と√の意味論
- 第8章 √の存在論：否定の接頭辞「不」と範疇変化
- 第9章 Elsewhere form としての「する」
- 終章 総括と結論、展望

まず序章で、先行研究を検討しつつ、「活用」と、「形態論」に対する本論文の理論的立場、目的を明らかにし、具体的考察対象を示す。

続いて第1章で、本論文の理論的枠組みである分散形態論 (Distributed Morphology 以下 DM とする。) を導入して活用に関する基本的な分析方法を示し、関連する音韻論的現象について論じる。

これに続く第2章～第5章では、活用形そのものについての直接的な分析が展開される。

第2章は、連用形についての考察である。様々な環境に現れる連用形の分布について記述した上で、その

分布の広さが第1章で導入した道具立てを用いれば一つの形態論的規則によって捉えられることを示す。具体的には、子音語幹動詞に対する母音挿入という連用形形成に関する形態論的規則が、活用形の形態論的規則の中でも最も指定が少ない、Elsewhere conditionとして特徴付けられることを提案し、これにより連用形の分布の広さが複数の複雑な規則を仮定すること無しに捉えられることを示す。またこの連用形の分析により、DMの重要な仮説の一つで、ある後期挿入(Late Insertion)を採用する。

第3章は、未然形を扱う。未然形を「活用」の一種として捉え、本論支で仮定する理論から、未然形が連用形と基本的に同じ、子音語幹動詞に対する母音挿入規則により形成されることを示す。このことにより、未然形を「活用」として捉えるのか、否定の助動詞「ない」の一部として捉えるのかという議論に対し、本論文の分析からはそのような問題にとらわれることなく形態の出現を予測できることを示す。

第4章では、否定推量形式「だろう」と「まい」の補文要素の非対称性についてとりあげる。推量形式「まい」の補文述語に、母音動詞の場合、連用形と終止形の両者が現れる現象および、「だろう」と「まい」のそれぞれの補文に現れ得る要素の非対称性について記述し、これを、「まい」がNeg, T, Mの三つの統語的主要部の具現形であると分析することで説明する。加えて、子音語幹動詞では「まい」の補文述語に終止形しか現れないこと、母音語幹動詞では連用形とともに終止形も現れることの形式的分析についても考察する。

第5章は、命令形の考察である。命令文の統語構造について検討し、命令形は第4章で導入した機能範疇Mにある素性に対応して現れると主張する。さらに、否定命令において命令形が現れず、「終止形+な」という形態が現れる事実について取り上げ、これについて不完全指定を用いた分析を示す。

第6章は、動詞と形容詞の形態論的な相違を扱う。動詞と形容詞は、繫辞「ある」の有無という点で異なった文構造を形成するという点を、語形成、否定辞の振る舞いに関する違いから導き出し、両要素が形成する統語構造の違いと本論文で提示した連用形の分析からそれらが説明できることを示す。この第6章は、第5章までの前半と第7章以降を結ぶ役割を果たす。

第7章～第9章は、語形成に関する詳細な理論的分析である。

第7章では、接頭辞「小/大」が動詞に付加する場合を取り上げ、その解釈が三種類に分類されることを示す。その上で語彙範疇的要素の基になる $\sqrt{\quad}$ という概念とその意味論的タイプを導入し、「小/大」がその $\sqrt{\quad}$ に直接付加すると考えれば上述の三種類の解釈の違いが導き出されることを明らかにする。

第8章では、否定の接頭辞が範疇変化を起こす現象に対して、第7章で導入した語彙範疇の「 $\sqrt{\quad}$ +範疇素性」への分解、「 $\sqrt{\quad}$ に直接付加する接辞」という二つの概念を用いて分析し、これが「右側主要部の規則」の例外ではないことを明らかにする。

第9章では、「する」という要素が第7章で導入した動詞の範疇素性[+V]についてのelsewhere ruleに合致した場合に具現するものであることを提案し、前二章でその有用性を検証した語形成への分析を用いることによって、様々な「する」の性質と分布の違いが説明されることを示す。

終章ではこれまでの考察をまとめ、本論文の結論と今後の課題、展望が示される。

審査の結果の要旨

「活用」の研究は、従来から日本語研究において多くの蓄積がある一方、理論言語学の立場で形態統語理論の観点からなされる研究は少なく、特に動詞の活用に関する包括的な研究は未だ行われていない。こうした中で本論文は、分散形態論という生成文法の枠組みを用い、動詞の活用形全体を統一的に捉えられるモデルを提示しようとする意欲的な研究であり、高く評価できる。

動詞の活用形の中、連用形に見られる、従属節を形成する際のいわゆる「連用中止」の用法、複合動詞の前項、動詞の名詞化など、一見共通点が見出せない複数の環境に現れる現象は、従来の活用研究の観点から

は説明することが難しく、等閑視されてきた。また、未然形、命令形も、活用形としての扱いについてこれまで議論が分かれ、課題を残している。

しかし、記述研究を深める上でも、また、日本語に対する形式的な形態統語理論研究においても、これを適切に捉えることのできるモデルを構築することは重要な課題となる。本論文は、この現象を日本語の分析に対して分散形態論が有効なモデルであるという経験的な議論を示すとともに日本語の諸現象の分析を通して、この理論で仮定される文法モデルや仮説の検証を行い、さらに、語形成に関する現象に関しても具体的な分析を加え、動詞がある形態で現れるということに対して統一的な説明を与えようとする。考察は、統語論、形態論に留まらず、音韻論の面も視野に入れ、幅広い射程で、丁寧に進められ、特に連用形についての分析は説得力を持つ。

一方で、連用形の詳細な分析に対し、未然形と命令形については、決定的な分析に至っておらず、分析の一層の洗練とさらなる経験的事実による支持が必要と考えられる。また、重要ないくつかの統語論的テーマと密接に関連する形態である終止形、仮定形についても、必ずしも包括的で十分な考察は行えていない。これらの分析の精緻化も望まれるところである。加えて、本論文では、第1章で活用分析の核となる一組の形態論的規則が示された上で、各章での分析に際して仮定されるべき形態論的規則が追加されるが、その中には、形態の分布をそのまま規則に書き写したに過ぎない感のぬぐえないものも存在する。これについては、分析をさらに深める、あるいは本論文では取り扱わなかった他の現象の分析と関連させることにより、より説明力を持った最小の形態論的規則が示される必要がある。

しかしながら、こうした課題を残しつつも、本論文の分析の理論的射程の広さ、徹底した観察と記述の上に慎重に進められる議論は、今後の日本語の活用研究、理論言語学的研究に新たな可能性を示す極めて価値の高いものと確信する。著者が本論文での課題を克服しつつ、今後さらにモダリティ形式の研究、語形成の研究、形態音韻論の研究、他言語との対照研究等、幅広く研究を進展させることが期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。